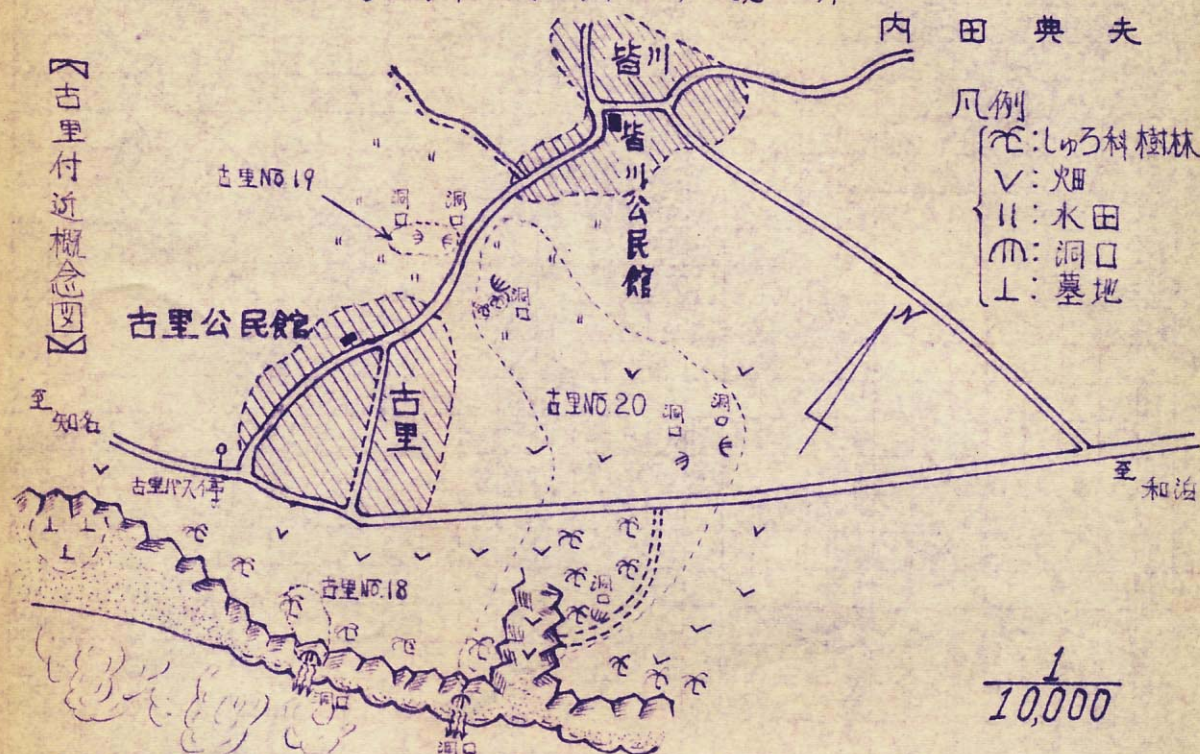


古里 NO.20 洞穴 洞内説明

内田 典夫

古里付近概念図



この洞穴は皆川から古里に抜ける道路の南側から海岸近くまで延びている。全長約2.7km(未測量部含まず)。今回の沖永良部島洞穴調査においては、もちろん最大級の一つである。岩盤の質が全般に弱く、一部の支洞を除いて洞内のほとんどが落盤を繰り返し、まだ角のとれていない巨岩がごろごろしている。そのため不必要に入り組んでおり、地底の迷路と化し、しばしば我々と戸惑わせる。雨水などの流礫による研磨作用はほとんど認められず、落盤による破壊作用というものが強く作用し、水の侵蝕作用と共に洞内をどんどん拡大しつづけ、言わば「生きた洞穴」「男性的な洞穴」として今なお活動を続けている。

この沖永良部島は古生層を基盤とした隆起珊瑚礁の島である。我々の先輩が以前にこの沖永良部島と徳之島の海底調査を行ったことがある。その報告によると、この島で発達している珊瑚礁は裾礁にあたるという。裾礁とは陸岸に形成された珊瑚礁で干潮時には礁原の一部が海面に現われ、海岸には珊瑚礁が洗われて生じた岩層が打ちあげられて浜が形成される。これらとはにかく、この島が隆起したことを裏付けるかのように他の洞穴と同様に、この洞穴においても貝の化石が発見された。又この洞穴の支洞の一部には相当数のコウモリが生息している。一般に見られるコウモリよりも少し大きい。そしてよく発達したリムストーンも見られるところがある。以上がこの洞穴の主な特色として挙げられよう。

次に洞内の各部分を順追って説明してみよう。まず南端の洞口A。これは天井が低く、横に幅広く拡がっており、落石で埋まり、数個の小さな隙間ができ、その狭い隙間より出入りすることゝ余儀なくされる。この洞口Aよりホールまでの間は均一で微かくきれいな流砂が少量に堆積しており、奥深くから流れてきた水流が洞内から逸れる。この水は

この洞穴より南側の海岸の中腹に流出している。ここよりさらに進むと
オノホールに着くが、ここはこの洞穴において最大の落盤地帯であり、
直径5~9mにも及ぶ巨岩がごろごろしており、天井は石灰岩層からは
み出し、赤砂や道路の敷石と思われる小石がちらほらと露出している。
(のちほど地図で調べたところ、この部分の地上と県道が走っていた)
そして地上を走る自動車の響きが鈍く聞こえ、時として天井から砂がバ
ラバラと落ちてきて、いまにも天井が崩れ落ちそうで無気味な様相を呈
している。地震がおこればどうなるか明白なことである。弾性体内の一
般波動は3次元に伝わり無限に拡がり、弾性体に変形するとその中の相
接した部分は互に力を及ぼし合い、これは相接した境界面を通して働く。
すなわち落盤が落盤を呼び、つまるところこの地帯一帯に大落盤が生じ、
県道はもろろん周辺の田畑なども崩れ落ちることは不可避であろう。こ
の奄美諸島一帯は環太平洋地震帯(わが国では、太平洋側・日本海側の
地震帯を各々外側地震帯・内側地震帯と呼ぶ習わしになっている)の一
部であり、歴史的に見た場合、この地域においては奄美大島の東沖、沖
縄本島の南東沖、与論島の西沖にかつて破壊的地震が起ったことがある。
このようなことから今後地震が起らないという保障はどこにもない。奥
係諸氏特に皆川、古里のオ々はこのことを特に留意して頂きたい、この
報告書が少しでもお役に立ちうるならば幸甚の至りである。そしてこの
オノホールから西へ進むと比較的高温で気流の流れがほとんどない支洞
がある。一帯が泥で覆われ、クアノ(コウモリ糞)が至る所に堆積し悪
臭を放っている。先程も述べたように200~300にも及ぶ驚くべき
数の大型コウモリがここで生活している。そしてここではよく発達した
フローストーンがたくさん見られる。又オノホールから北へ本洞と2本
の支洞が枝別れしている。本洞〔イ〕部付近は上下2層になつており、こ
れらを貫いている煙突NO.1がある。この付近は小さな未発達をつらう石
や鍾乳管が見られる。これより洞口Dまでは、一面が砂で覆われ、平凡
な空洞に終わる。洞口Dまでの途中〔ロ〕部では天井低く、底部は微かい
砂で山になつてゐる。ところがこれより北に進んだ支洞に入ると一面が
泥で、〔ハ〕部ではそれが山になつてゐる。〔ニ〕部ではつらう石が泥に包
まれ、微小なハエのような生物があちこちに飛んでいる。さらに〔ホ〕地
点で獣骨や巻貝がみかかる。〔ヘ〕部では非常によく発達したリムストー
ンが見られ、底は泥で足を踏み入れると20cmほど入る。又この部分の
フローストーンも非常にきれいで、この洞穴では、コウモリのいる支洞
と共に最大の見所である。〔ロ〕まで戻り、そこから西へ進むと、らせん
状の〔ト〕部にたどり着く。ここはメタンが入のような悪臭を放つが入が
充満しており、我々を少々不安にさせる。そして〔チ〕部には大きなボール
があり、底は層の厚い泥で覆われ、足がめり込み、まるで沼である。洞
口D付近では上・中・下の3層になつており、上層部は洞口Dに出、中層
部は洞口Dの真下で行き詰つてゐる。下層部はさらに北西の方向に続い
ているがこれより先は単調な空洞で、洞口付近から先は泥は見られなく
なる。

以上がこの洞穴における概観であるが、繰返して述べるならば、全般
にみて、大きくはあるが見るべきところは少なく弱岩盤質であるため、
落盤の危険の多い洞穴である。